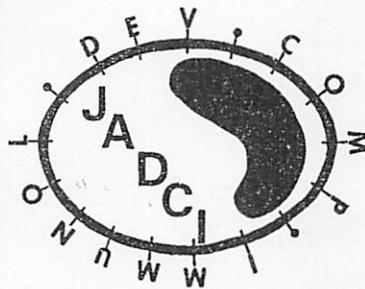


# JADCI News

No.20

2001. 11. 16



The Japanese Association  
for Developmental and  
Comparative Immunology

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadci/index.html>

Office address:  
Department of Biology,  
Nihon University School of Medicine,  
Itabashi-ku, Tokyo 173-8610

目次：

	頁
比較免疫学会誕生のあとさき	片桐 千明 ----- 1
幻が幻で無くなった日	上田 浩史 ----- 6
日本比較免疫学会第 13 回学術集会を終えて	安住 薫 ----- 8
日本比較免疫学会第 14 回学術集会へ向けて	黒澤 良和 ----- 11
第 13 回日本比較免疫学会総会議事録	----- 13
次期会長選挙日程	----- 14
役員会より（次期会長推薦について）	----- 14
会員名簿追加・変更	----- 15
事務局より：所属変更時の通知依頼／会費納入願い	----- 16
新会員の入会を歓迎いたします（入会申込書）	----- 17

発行者：日本比較免疫学会会長 古田恵美子

事務局：庶務・会計 宍倉文夫

補助役員 大竹伸一 阿部健之

住所：〒173-8610

東京都板橋区大谷口上町 30-1

日本大学医学部生物学教室内

事務局 e-mail：jadcitnk@med.nihon-u.ac.jp

電話：03-3972-8111 内線 2291（生物学教室）

Fax.：03-3972-0027（医学部庶務課扱い）

郵便振替：口座番号 00120-4- 18034

加入者名 JADCI

## 比較免疫学会誕生のあとさき

天使大学 片桐千明

はじめに、極く個人的なつぶやきをさせて頂く。先日、今年度のノーベル医学生理学賞が発表され、細胞分裂周期の制御機構を解明した功績により英米の3名が受賞したが、その中に候補者としてかねて有力視されていた30数年来の畏友・増井禎夫氏（トロント大）は含まれていなかった。いろいろなさされている憶測のなかでありそうなのは、授賞が分裂期の真核細胞に普遍的なMPFという「活性」の発見に対してではなく、それをもたらすタンパク質（モノ）の同定に対してなされた、ということであろうか。だが、特定の成熟期のカエル卵の細胞質をガラス針で抜き取って他の細胞に移すことによってM期を誘導するといったアプローチによって細胞周期の制御機構に迫り研究方向をリードした、というところにこそ生物学の醍醐味がある、と学生に力説してきた私などにはまことに残念な結果ではあった。ひるがえって過去には、F.M. Burnetのように大胆な理論的仮説と推論にもとづいて免疫研究に指導的役割をはたしたことが評価された例もある。でも、はじめから抗体遺伝子の再配列という事実をつきつけられて免疫学を勉強し始める現今の学生たちに、免疫現象の生物的な面白味、深みや、それを解明するために仮説がはたした役割はどうやって伝えることができるのだろうか？

さて、長年にわたって不義理を続けているこの学会から「会報」への寄稿を依頼されたのは恐縮の至りであり、重荷でもある。そこで、すでに研究の現場から離れた立場にあるものとして唯一なし得ること、古い記録を整理して記し、また日頃気になっていることがらを付記することで、せめてもの罪滅ぼしとしたい。

比較免疫学がそれと自覚された領域として成立するには、1976～77年に相次いで出版された3つのテキストブックが大きく貢献したと思われる。それらのうち、Cooper, E.L. "Comparative Immunology" (Prentice-Hall, 1976) と Manning, M.J. & Turner, R.J. "Comparative Immunobiology" (Blackie, 1976) はそれまでの免疫学の教科書がまったく触れていなかった広範な無脊椎動物たちが示す生体防御のパターンにわれわれの眼を向けさせてくれたし、また Marchalonis, J.J. (Edward Arnold, 1977)の本はこれを大学院生たちと輪読することを通じて脊椎動物の免疫システムの基本を勉強できた、という思い出が

ある。そして、1977年に発刊されたジャーナル"Developmental and Comparative Immunology"がこの分野への関心を惹きよせ、刺激するのに寄与したことは云うまでもない。

ところで同じ頃（1976年）、日本動物学会大会で「比較免疫学」と銘打ったシンポジウムがはじめて開かれた。聞くところによれば、その2、3年前ハワイでHildemann, Cooperらの主催で開かれた国際学会に出席し、強い感銘を受けた田中邦男、大西耕二氏らが企画したというこの集会は、国際的にみてもかなり先がけたものだったに違いない。両氏の努力でそれ以後動物学会のサテライトシンポジウムとして毎年開かれるようになったこの集會を、私達は1980年以後事務局とともにお預かりして1989年の本学会発足へとつなげることができた。以下のページにまとめて示されるさまざまな話題・演題は、期せずして比較免疫学の流れを反映している。つまり、当初は機能分子としてのIgおよび二次応答の有無とその担い手としてのリンパ球を指標に防御反応を見る、という方法論が主流で、その流れが獲得免疫能力を段階的に備えた有顎脊椎動物とそれを一部またはすべて欠く無顎脊椎動物及び無脊椎動物との違いを分子的にどう理解するかという現代の課題につながっている。一方、80年代以降登場することが多くなる無脊椎動物への関心は、上述の脊椎動物型免疫の指標に沿わない応答様式に遭遇し、またいわゆる系統発生の図式と単純に合致しないさまざまな防御反応のありかたから必然的に痛感された、個別事象の重視と問題発掘の必要性に根ざしたものとみなされよう。またこの傾向は、分子生物学に代表される還元主義主導の生物学から多様性を重んじる生物学へという新しい流れに符号するのもかも知れない。

このように、本学会のスタートにはそれに先立つ「比較免疫学シンポジウム」の積み重ねが一定の役割を果たしたことは疑いないが、さらに末尾に掲げられた1967年のもうひとつの集會にも注目しておきたい。分子を特異的に認識するための研究手段としての免疫的手法が有望視され始めて間もない時期に開かれたこの集會で、技術としての側面と研究対象としてのそれがミックスして並べられているのは致しかたない（因みにこのシンポジウムに声をかけていたが渡米中のため参加できず、翌年出版された論文集に紙上参加した私の論文タイトルは、「カエル卵ゼリーの抗原性と受精における役割」であった）。しかし、その後のあらゆる生物学分野での技術としての普及と広がり、およびそこですでに取りあげられている現象のいくつかの重要性をみると、この集會をわが国における非医学の分野での免疫生物学的集會の嚆矢と位置づけ

てよいであろう。そのような時期にこの集会を企画した岡田節人、村松 繁両氏の慧眼と先見性に敬服を禁じ得ない。

閑話休題。ちょっと気になっていること。「日本比較免疫学会」の英語表記はJADCIであって、Developmentalが入っている。もともといろいろな分野で「比較〇〇学会」というのはごく普通で、その場合「比較」とは系統発生を意味すると理解されている。だとすれば、免疫生物学に限っては、単なる系統発生と区別する意味で特に個体発生を重視する理由があるのではないか？事実、クローン選択説、T、B細胞の分化、免疫寛容性および免疫的自己の成立など、獲得免疫の成立のしくみの理解に個体発生的な視点が不可欠であることは容易にうなずけよう。他方、個体発生過程で変態という特異なプロセスをとる昆虫や両生類などは、同一個体のなかで古い自己と新たな自己をどう両立させているかという難問をつきつける。そのような問いに関連して我々がアフリカツメガエルから学んだ一例を紹介しよう。この動物では、幼生のごく初期から完全に成体レベルとはいえないまでもかなりの免疫能力が発達するが、変態期にはからだ全体のリンパ球が大幅に減少し、MHCハプロタイプを共有する異個体の移植片なら受け入れるまでに免疫能力が低下する。枋内 新氏（北大）らによれば、この変態期特有の寛容性は特異的抑制性のT細胞によるという。それとは別に井筒ゆみ氏（新潟大）は、成体に幼生の皮膚を移植すると同系個体由来でもそれを拒絶するという不思議な事実を発見した。移植された皮膚は、それが変態期に成体型に換わる胸部であればやがて拒絶されなくなるが、幼生型のまま退化吸収される尾部の皮膚は常に強い拒絶の対象であり続ける。面白いことに、変態期が近づくと幼生特異的抗原が出現し、それが特に尾では強く発現し続けるという。これら一連の観察をつなげると、変態という体制の大がかりな刷新に伴って新たに出現する種々の分子に寛容であるべく免疫能力を全般的に低下させる一方、捨て去るべき尾のような組織には拒絶の対象としてできるだけ目立つように抗原を発現させる、という巧みな戦略が垣間見えてくるではないか。Developmentalな関心とアプローチから掘り起こすべき課題はいくらでもありそうだ。ノーベル賞の対象にまでは達しないにしても。

## 比較免疫学シンポジウムの歩み

第1回 1976 広島 (鮎沢啓夫・粟屋和彦・村川新十郎・渡辺 浩)

無脊椎動物における免疫的現象 鮎沢啓夫 (九大・農)  
円口類におけるリンパ球の分化 粟谷和彦 (山口大・医)  
魚類の免疫 - 水産におけるその応用 室賀清邦 (広大・水)  
両生類における免疫機構の発生 片桐千明 (北大・理)  
鳥類における免疫機能 佐藤孝二 (名大・農)

第2回 1977 山形 (田中邦男・大西耕二)

無脊椎動物の生体防御 - カプトガニの凝固系を手がかりとして 丹羽 允 (大市大・医)  
アメリカロブスター *Homarus americanus* の生体防御機構 森 勝義 (東北大・農)  
免疫グロブリンの起源と進化 - 現状と理論的アプローチ 大西耕二 (新潟大・理)  
ヘビ血清中の自然抗体 川口 進 (京大・理)

第3回 1978 熊本 (大西耕二・田中邦男)

血液型物質の動植物界における分布並びに免疫学的性状と存在意義 山本 茂 (科警研)  
リンパ球の発生 - ニワトリを中心にして 高木知道 (岩手医大・歯)  
哺乳類の補体系について 奥田智子 (東北大・抗研)

第4回 1979 東京 「両生類の免疫応答」 (大西耕二・田中邦男)

アフリカツメガエルの免疫応答における胸腺リンパ球の役割 永田三郎 (北大・理)  
無尾両生類の移植片拒絶反応 - 雌性発生二倍体を用いた研究 川原浩通 (北大・理)  
*Xenopus laevis* の体液性免疫 山口宣夫 (金沢医大)  
各種カエルの免疫能とその比較 木村一郎 (東大・医)  
両生類におけるヒツジ赤血球抗原に対する免疫応答 大西耕二 (新潟大・理)

第5回 1980 静岡 (田中邦男・大西耕二)

ワクチン接種によって蚕体液中に誘導される抗菌物質 菊池幹雄 (近畿大・医)  
昆虫の血液細胞の特性と機能 赤井 弘 (農林蚕試)  
海産無脊椎動物の血球 - ホシムシ類を中心に - 越智 修 (愛媛大・理)  
ホヤにおける群体特異性 種田保穂 (横国大・教育)

第6回 1981 札幌 (片桐千明・大西耕二)

昆虫食細胞による異物認識の現状と問題 和合治久 (埼玉医大)  
近交系メダカの組織移植性 田口泰子 (放医研)  
着床とマクロファージ 館 舜 (東大・理)

第7回 1982 大阪 (片桐千明・大西耕二)

昆虫の生体防御反応に対する体内捕食寄生バチの抵抗性について 北野日出男 (東学芸大)  
 マボヤ (*Holocynthia roretzi*)における自己・非自己の識別 富家雅子 (金沢大・理)  
 パネル討論:「動物学における免疫学」 村松 繁 (京大・理)

第8回 1983 松山 (高木知道・越智 修)

魚類の抗体産生細胞 友永 進 (山口大・医)  
 メダカにおける移植片拒絶反応 — 黒色素胞の崩壊を指標として 菊池慎一 (千葉大・理)  
 アフリカツメガエルを使ったT細胞の分化の解析 — 特に胸腺の機能 永田三郎 (都老人研)  
 Apoptosis (programmed cell death)としての胸腺細胞放射線間期死 山田 武(放医研)  
 系統発生と免疫グロブリンクラス及びその構造 小林邦彦 (山口大・医)  
 脊椎動物に普遍的に存在する血清殺菌レクチン 川上正也 (北里大・医)

第9回 1984 盛岡 (高木知道・片桐千明)

昆虫の体液性レクチンと生体防御 名取俊二 (東大・薬)  
 補体系の進化 — ニジマスとヤツメウナギの補体成分 野中 勝 (金沢大・がん研)  
 無尾両生類の補体系とマクロファージ 藤井 保 (北大・理)

第10回 1985 東京 (片桐千明・高木知道)

昆虫血液に見出されたカスケード反応の細菌細胞壁による活性化 芦田正明 (北大・低温研)  
 老化と免疫 広川且晃 (都老人研)

第11回 1986 福岡 (高木知道・片桐千明)

生体防御のしくみ — 比較免疫学とのつながり 野本亀久雄 (九大・生体防御医研)

第12回 1988 札幌 (古田恵美子・片桐千明)

メダカの免疫機構の形態学 中村弘明 (独協医大)  
 ショウジョウバエの生体防御 浅田伸彦 (岡山理科大・理)  
 複合ホヤにおける自己・非自己の認識 斉藤康典 (筑波第・下田臨海)  
 (これらの資料を整えるためにご助力下さった藤井 保氏 (広島女大) にお礼申し上げます)

日本動物学会シンポジウム (1967年・京都)

免疫 — 技術およびテーマとして — (岡田節人・村松 繁)

シンポジウムの問題点 岡田節人  
 性についての抗原分析 — フナおよび七面鳥の場合について — 鈴木紀雄  
 プラナリア再生における抗原分析 木戸哲二  
 イモリの移植免疫 村川新十郎  
 赤血球膜抗原の生物学的特異性 古沢 満・足立英斉  
 マウスのプラズマ細胞腫瘍 森脇和郎・今井弘民・吉田俊秀  
 ホヤの群体特異性 渡辺 浩・田中邦男

## 幻が幻で無くなった日

帝京大学薬学部

上田 浩史

先日、山梨方面へブドウ狩りに行ったときのこと、あるサービスエリアで思いも寄らないものに遭遇した。お土産コーナーの片隅に、私がかつて見たことも無いクワガタが売られていたのである。それは、飼育箱に大事そうに入れられ、値札が付いていた。「72mm。78,000 円！」その大きさとともに、値段にも驚いた。そう、それは、希少なオオクワガタだった (図 1)。

山国で育った私は、幼少の頃から、昆虫採集にあけくれ、「昆虫博士」の異名を取り、それが今日、サイエンスに従事するきっかけであったと言っても過言ではない。そんな私でも、オオクワガタだけは捕まえた事の無い、まさしく「幻のクワガタ」だったのである。

そもそも、どうしてオオクワガタが幻なのか？オオクワガタは日本最大のクワガタであるが、もともと生息数が少なく、その生態があまりわかっていなかった。他のクワガタ同様に、クヌギ等の樹液を吸うが、行動するのは夕方から深夜にかけてであり、昼間は大きな木のウロ (穴) の中に隠れている。したがって、その採取方法は、大木にはしごをかけて、ウロを探ることが多いようである。しかし、オオクワガタは非常に敏感で、人の足音や懐中電灯の光などを感知すると、穴の奥底に隠れてしまう。そのため、内視鏡を改良した特殊な道具を駆使する輩もいるそうである。これらの情報は、昨今のオオクワガタ・ブームにより広まった方法であるが、到底、子供達が日常的に出来る方法ではないし、滅多にお目にかかれなかった所以でもある。

また、オオクワガタは、倒木等の朽木に卵を産み、幼虫はそれを棲家とする。このため、オオクワガタの採取は、夏場に成虫を採取するのではなく、冬場に朽木を片っ端から割り、幼虫を採取し、立派な成虫になるまで大切に育てる者もいる。幼虫の飼育方法も、昨今のブームにより確立され、広まった。しかし、この行動が森林を荒らすことになり、貴重なオオクワガタを、さらなる「幻」に追い込んでいることも事実である。

このようなオオクワガタの生育環境に適した地域が日本に何箇所か有り、実は、私の訪れた山梨県韮崎地方は日本一有名なオオクワガタ産地であった。私は、ちょっと立ち寄ったパーキングエリアにさえ、オオクワガタが売られており、さすが本場だなあと、年甲斐も無く、食い入るように観察した。それは、

少年期にやり残した事を実現出来たかのような至福の一時であった。しかし、次の瞬間、その気持ちは一気に消滅した。売店の定員が、私に話し掛けてきたのである。「お客さん、うまく育てると、来年、高く売れるよ！」オオクワガタは、他のクワガタやカブトムシと異なり、成虫になっても、越冬して数年生きる事も特徴である。そのため、季節外れでも、売られていたのかも知れない。オオクワガタが高値で取引されるのは有名な話である。「1mm=1000円」と称され、1999年には80mmのオオクワガタが1千万円で取引され、話題になった。その店員も、その当時の新聞記事を差し出し、購入を勧めた。さらに驚いた事に、値札をひっくり返すと、なんとラオス産…。地元の方が苦勞して捕まえたものを展示販売していると想像し眺めていたからこそ価値があったのに、その思いは一気に覚めた。

改めて調べてみると、平成11年11月に、植物防疫法が一部改正され、外国産のクワガタとカブトムシ合計44種が輸入解禁となったそうである。植物防疫法の輸入禁止対象から外されたということは、「害虫ではない」と判断された事を意味する。しかし、その中には、樹木の細枝を切り落として切り口から出る汁をなめたり、蜜を吸うために花に傷をつける習性を持ったクワガタも多く、害虫となり得る可能性は否定できない。また、直接の害だけでなく、逃亡したり放虫された個体が、既存の個体群を攪乱したり遺伝子汚染をする可能性もある。すでに、養殖業者の間では、大型化を追求して、東南アジア産個体とのペアリングが行われ、純日本産オオクワガタの血統が失われつつあるそうである。もっとも、数万円もする昆虫を、そうやすやすと逃がさないかもしれないが…。

そもそも、カブトムシがデパートで売られる事にさえ違和感を憶えていた。「幻のオオクワガタ」が高価な商品として売られている環境で育つ子供達が、探究心、観察力、好奇心、等々を培う機会を逸し、比較免疫学をはじめとするサイエンスに入門するきっかけを奪われないか危惧している。はるばる遠い国から連れてこられた「売れ残りのオオクワガタ」が不憫に思えた。

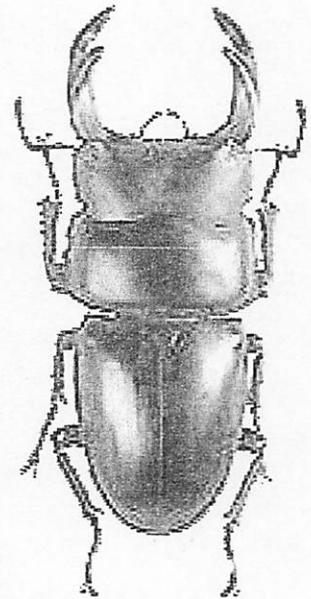


図1 オオクワガタ  
あなたの価値は？

## 日本比較免疫学会第 13 回学術集会を終えて

北大大学院薬学研究科・生化学分野 安住 薫

日本比較免疫学会第 13 回学術集会は、2001 年 7 月 23 日から 25 日にかけて、猛暑の本州とはうって代わり、例年より涼しい札幌郊外の定山溪ビューホテルにて開催された。北のはずれの地での泊まり込みの学術集会にもかかわらず、外国人 1 名を含む、約 60 名がご参加下さった。北海道での初めての学術集会でもあり、また、新世紀最初の学術集会でもあることから、昨年暮れ、学術集会長横沢英良先生の指揮のもとに芦田正明先生、柄内新先生、そして安住の 4 人からなる組織委員会が作られ、学術集会内容についての討議が行われた。記念すべき第 13 回学術集会は、定山溪の温泉街にて泊まり込みで行うこと、比較免疫学の対象とされている主な動物門について、「これまでの到達点」と「今後の展望」を共通のキーワードとしたシンポジウムを開催すること、一般演題はポスター形式で行うことが確認され、今回のような開催形式に至った。

学術集会 1 日目 (7 月 23 日) は、会場ホテルにて 15 時からの受け付けで始まった。札幌からの貸し切りバスで到着の一行には、ホテルの玄関で、艶やかな衣装のロシア人ダンサーたちによるお出迎えがあり、戸惑った先生たちが大勢いらした。各自食事を済ませた後、19 時半から一般講演が開始された。初日の一般講演は、ポスター演者たちによるポスター要約発表で、本学会ではおそらく初めての試みだったと思われる。通常のポスター発表に先立ち、扁形動物、軟体動物、節足動物、原索動物、魚類、両生類、ハ虫類の順番で、21 名のポスター発表の演者たちが、OHP 1-2 枚を用いて一人 3 分の要約発表を行った。誰がどのような内容でポスターを発表するのかがよくわかり、翌日午前中のポスター会場での活発な討論につながったと思う。22 時からは比較免疫学会恒例の「深夜懇談会」が開催された。ホテル側のご厚意で、最上階に近いフロアのスイートルームを会場として提供していただき、豪華な部屋の思い思いの場所で、20 人以上の参加者が集い、お酒を飲みながら熱い議論で早くも盛り上がった。

学術集会 2 日目 (7 月 24 日) は 9 時半からのポスター発表で始まった。力作ぞろいのポスターの前で、熱心な討論が午前中いっぱい続いていた。総会および昼食の後、13 時から本学術集会の目玉であるシンポジウム「比較免疫研究の現状と課題：その 1」が開始された。昆虫の生体防御系のセッションでは、「昆虫の生体防御研究におけるクチクラの重要性」を北大・芦田正明氏が、「ショウジョウバエの生体防御反応を制御するパターン認識分子」を東北大・倉田祥一郎氏が発表し

た。続く、カブトガニおよび軟体動物の生体防御系のセッションでは、「カブトガニ生体防御系の特殊性と普遍性」を大阪府立看護大・丹羽允氏、「カブトガニヘモシアニンの多機能性と生体防御反応」を九大・川畑俊一郎氏、「軟体動物の生体防御」を比較免疫研究所・古田恵美子氏がそれぞれ発表した。無脊椎動物の生体防御因子群については、昆虫とカブトガニの解析がもっとも進んでおり、節足動物の生体防御因子群の多様性に改めて驚いた。この後、要旨集にはない教育講演、「ホヤゲノムサイエンスの展開と応用」が京大・佐藤矩行先生によってなされた。佐藤先生は、この時期来札の用事があり、学術集会長の横沢先生と古くからの「ホヤ仲間」のよしみもあって、学術集会でのご講演をお願いしたところ、快く参加して下さった。現在、ホヤのゲノムプロジェクトおよび網羅的 cDNA 解析プロジェクトが、佐藤先生を中心に日本ですすすめられており、その展開と今後の展望についての講演がなされた。続いて、特別講演として、「センチクバエの生体防御機構」について理研・名取俊二先生が、「比較免疫学と発生」について天使大・片桐千明先生がお話になった。生体防御システムと個体の発生システムは全然別のものと多くの方は考えているかもしれないが、お二人の先生のご講演から、個体発生のシステムで使われている因子群が、成体において今度は防御システムで機能すること、あるいは生体防御系と個体発生には密接な関係があることがわかり、大変感銘を受けた。18時半からホテル内の大広間で懇親会が開催された。懇親会は、通常立食式とは異なり座敷でのお膳形式だったので、恒例の古田先生のイブニングドレスは「深夜懇談会」にてお披露目がなされた。この懇親会では、栃内氏の司会のもと、来年の学術集會会長の黒澤先生からのあいさつおよび、飛び入り参加をして下さった佐藤矩行先生からのあいさつがなされた。佐藤先生からは「もっと若い学生たちがたくさん参加する学会にするように」との辛口の御助言がなされた。さらに、この懇親会の後に大イベントが待ち受けていた。この時期、ビューホテルでは連日、ロシア人のダンサーたちによるダンスとマジックのショーが1時間ほど開催されていた。学術集會会長横沢先生のご厚意で、希望者の方々（ほとんど全員だったが）に招待券が配られ、みんなで参加した。広報担当の安住は、内容を知らずに参加を呼びかけ、招待券を配って歩いたのだが、後でショーの内容を知って大赤面であった。にもかかわらず、ショーの参加者は性別、年齢を問わず大いに盛り上がり、学術集會会長をはじめ、何人もの先生方が舞台上ダンサーの方々と一緒にダンスを披露して下さった。その余韻はさめることなく「深夜懇談会」へとつづき、昨日と同じスイートルームでの深夜の議論がさらに盛り上がった。基生研の高橋氏が何度も酒類を買いに近くのコンビニに走ってくれた。

学術集会最終日（7月25日）は、プログラムの関係上、8時45分からシンポジウム「比較免疫研究の現状と課題：その2」が開始された。連日の深夜の議論にもかかわらず、ホヤ類の生体防御系のセッション、「群体ボヤにおける群体特異性」（筑波大・斎藤康典氏）、「ホヤ類の生体防御：マボヤ血球の生体防御反応」（日大・大竹伸一氏）、「ホヤ類の生体防御機構における液性防御因子の役割と免疫関連遺伝子の発現」（北大・安住薫）の発表について、熱心な質疑応答がなされた。続いて、魚類および円口類の生体防御のセッションでは、「円口類の生体防御」を広島女子大・藤井保氏が、「魚類の生体防御」を日大・中西照幸氏が概論して下さった。さらに、両生類、鳥類および哺乳類の生体防御系のセッションでは、「両生類の生体防御システム」を北大・柄内新氏、「鳥類免疫系の進化」を日本生物科学研・中村俊博氏が発表下さり、最後に本シンポジウムのまとめもかねて、「哺乳動物と他の動物の生体防御系の接点」のタイトルで、埼玉医大短大・和合治久氏が発表された。脊椎動物門の生体防御システムは基本的には、哺乳動物と同じであるが、各動物において、生体防御の基礎的な研究が、産業と密接にかかわる分野で新たな展開へと結びついているのが興味深かった。最後の総合討論はすでに時間がなく、学術集会長横沢英良先生のあいさつで閉会となった。別れを惜しむ間もなく、参加者の大部分はあわただしく貸し切りバスで札幌に戻り、帰路に発つ人、北海道観光をする人、次の仕事の打ち合わせをする人などなど、それぞれに散会した。

今回の学術集会は、学術集会長のアイデアで、主な動物門の生体防御システムの到達点と課題というテーマでそれぞれの分野の第一人者による講演が行われた。いわば、日本の比較免疫研究の全体を総括するような内容であった。また、特別講演として日本の比較免疫学をリードされてきたお二人の先生のご講演があり、教育講演としてヒト以外の動物を用いたゲノムサイエンスの最先端の話も聴け、学術集会の内容がハイレベルで盛りだくさんであったことと喜んでいる。さらに、会場の定山溪ビューホテルは、複数の温泉風呂に加え、地下に大きな温水娯楽施設を有するゴージャスなホテルで、集会会場の会議室も各自の宿泊部屋も快適な設備で、札幌の温泉街でのリゾート生活を満喫していただけたことと思う。

「もう思い残すことはない。」「またこのホテルで学術集会をやってほしい。」という参加者の感想も寄せられ、組織委員会としては大成功であったと自負している。

今回の学術集会の開催にあたり、献身的にご尽力下さった横沢学術集会長をはじめ、組織委員会の先生方、演者の先生方、そして参加して下さいたみなさま、関係者の方々に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございます。また、来年、学術集会にてお目にかかれますことを楽しみにしております。

## 日本比較免疫学会第 14 回学術集会へ向けて

第 14 回学術集会長

黒澤 良和

(藤田保健衛生大学総合医科学研究所)

本年 7 月 23 日—25 日、北海道定山溪で行われた第 13 回集会からもう 100 日以上経ったわけですね。未だたった 100 日しか経っていないという印象でしょうか。いずれにしてもこの間に起こったことのあまりの衝撃力に唖然としております。21 世紀は決してバラ色で語れないとんでもない世紀のようです。本比較免疫学会第 1 回が 1989 年に行われたということは、Japan as number one として幻想に浮かれていたバブルの絶頂期に学会が始まったのですね。

さて、来年の第 14 回比較免疫学会の集会長をお引き受けし、とにかく 8 月 26 日 (月) —28 日 (水) に名古屋ガーデンパレスホテルで行うこと、そして国際比較免疫学会の会長をしている Dr. Louis du Pasquier を招待することだけは決定しました。

茂呂先生が会長をされた第 12 回は特別講演 2 題、招待講演 1 題、そしてシンポジウムで 4 人が話しをして 34 題の一般講演がありました。

横沢先生が会長をされた第 13 回はシンポジウムを中心にプログラムを作られましたので 13 人が話され、特別講演が 3 名、そして一般演題は 21 題で要約が oral で基本はポスター発表でした。

今回はどのようにすべきでしょうか。

学会は基本的に学会員の、学会員による、学会員のためのものです。片桐先生は講演の中で本学会は比較免疫学シンポジウムを前身として 1976 年から毎年行われている会であることを指摘されました。そこから考えると既に 4 半世紀を越えたこととなります。学会員は毎年集会に参加する時にこの学会に何を期待しているのでしょうか。

私などは折角 Dr. Pasquier を呼ぶなら英語でシンポジウムを行って、スピーカーは学会員ではなくても構わないから 2 種類ぐらいのシンポジウム (fashionable な話題) を組んで、と考えますが、実はこのように考えること自体が非常にピントはずれの気がします。そのようなものなら免疫学会でも行われている。私自身が、夜に友人と酒を飲んで話をするために参加している単なる「飲んべえ」という存在である気がします。

佐藤先生がはからずも指摘しましたが、「若い人が少ない」のは今回北海道だったことを差し引いてもきっと最大の問題でしょう。学会員の方からの様々なアイデアを募集します。どのような意見でも結構です。下記にどのように集会をやって欲しいという意見を出して下さい。

黒澤良和

470-1192 愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪 1-98

藤田保健衛生大学総合医科学研究所

TEL 0562-93-9387, FAX 0562-93-8835, e-mail kurosawa@fujita-hu.ac.jp

学会は学会員のためのものであり、参加して有意義だと感じるものにしたい  
と思います。

\*\*\*\*\*

### 日本比較免疫学会第14回学術集会

期日 平成14年8月26日(月)～28日(水)

会場 名古屋ガーデンパレス(名古屋市)

\*\*\*\*\*

## 第13回日本比較免疫学会総会議事録

日時：平成13年（2001年）7月24日（火）午前11時30分～

会場：定山溪ビューホテル

会長の挨拶： 古田恵美子

議長選出： 古田会長

第13回学術集會長の挨拶： 横沢英良

### 報告事項

(1) 会務報告（事務局：宍倉文夫）

JADCI News 発行状況について以下の報告があった。

News 18号（発行日：平成12年10月25日）、19号（発行日：平成13年3月7日）を発行した。次号（20号）は、平成13年11月の発行を予定している。

(2) 次期（第14回：2002年）学術集會について（次期学術集會長：黒澤良和）

第14回学術集會は平成14年8月26日（月）～28日（水）、名古屋ガーデンパレスで開催される旨説明があった。ISDCI 会長の Dr. Louis Du Pasquier (Basel Institute for Immunology) の講演、環境攪乱物質などのシンポジウムを予定している。

(3) 次次期（第15回：2003年）学術集會について（古田）

第15回学術集會は帝京大学薬学部の山崎正利学術集會長が、平成15年開催する予定、詳細については未定と説明があった。

(4) 日本比較三学会合同シンポジウムについて（副会長：和合治久）

今年度の担当は日本比較内分泌学会で、日本比較三学会合同シンポジウムはその大会期間中の12月2日の午後1時半～5時に行われ、当学会からは、九州大学の中尾実樹、日本大学の宍倉文夫の両会員がシンポジストとして講演することになったと説明があった。

(5) ホームページについて（HP委員：阿部健之）

日本比較免疫学会のホームページに関して以下の報告があった。古田会長からホームページ委員として広瀬裕一（琉球大）（委員長）、中尾（九大）、阿部（日大）が委嘱された。和合副会長の原案を下敷きにして作成したホームページを平成13年1月国立情報学研究所のサーバに開設した。ホームページには、学会の歩みと設立趣旨、学会活動案内、組織、学会会則等が日本語および英語（一部は準備中）で掲載されており、主要な学会へのリンクページもある。ホームページに関するアンケートを行っているので協力をお願いした。古田会長から、ホームページに掲載してある今回の学術集會のプログラムは日本語のみとなっているが、次回からは英語でも掲載すると補足説明があった。

(6) 古田会長からの寄付について（宍倉）

古田会長から50万円の寄付をいただいたと報告があった。

### 審議事項

(1) 平成12年度の会計決算（庶務・会計担当補助役員：大竹伸一）

平成12年度会計決算の報告があった〔総収入は1,371,468円（前年度繰越金



## 会員名簿 (2001年5月11日版) 追加・変更 (その1)

### 追加 (新入会)

安達 禎之 ADACHI YOSHIYUKI

- 1) 〒192-0392 東京都八王子市堀之内1432-1
- 2) 東京薬科大学薬学部免疫学教室
- 3) TEL. 0426-76-5599 (直通)  
FAX. 0426-76-5570  
E-mail. adachiyo@ps.toyaku.ac.jp
- 4) 微生物成分に対する免疫応答

佐々木 哲彦 SASAKI TETSUHIKO

- 1) 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
- 2) 東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻
- 3) TEL. 03-3812-2111 (内) 4449  
FAX. 03-3816-1965  
E-mail. sasaki@uts2.s.u-tokyo.ac.jp
- 4)

田村 弘志 TAMURA HIROSHI

- 1) 〒207-0021 東大和市立野3丁目1253
- 2) 生化学工業(株)中央研究所 試薬診断薬開発部
- 3) TEL. 042-563-5822 (直通)  
FAX. 042-563-5846  
E-mail. tamura@to.seikagaku.co.jp
- 4) 生化学、微生物学

土屋 隆英 TSUCHIYA TAKAHIDE

- 1) 〒102-8554 千代田区紀尾井町7-1
- 2) 上智大学理工学部化学科生物化学研究室
- 3) TEL. 03-3238-3365  
E-mail.  
t-tsuchi@hoffman.cc.sophia.ac.jp
- 4) 無脊椎動物の生体防御

### 所属等の変更

張 正淳 CHANG, CHUNG-SOON

- 1) Incheon 402-751, KOREA
- 2) Dept. of Biochemistry, College of Medicine, Inha University
- 3) TEL. +82 32 890-0931  
FAX. +82 32 884-6726  
E-mail. cschang@inha.ac.kr
- 4) Invertebrate defense molecules and their applications as a bioactive materials. Screening of bioactive materials from marine organisms in mud-flat.

古田 恵美子 FURUTA EMIKO

- 1) 〒330-0015 埼玉県さいたま市蓮沼1250-9-401
- 2) 比較免疫学研究所
- 3) TEL. 048-686-0205  
FAX. 048-686-0205
- 4) 陸生軟体動物の生体防御

菊池 慎一 KIKUCHI SHIN-ICHI

- 1) 〒261-8502 千葉市美浜区真砂1-2-2
- 2) 東京歯科大学生物学教室
- 3) TEL. 043-270-3995  
FAX. 043-270-3996  
E-mail. kikuchis@peach.ocn.ne.jp
- 4) 魚類の免疫系

黒田 丹 KURODA AKASHI

- 1) 〒876-1204 大分県南海部郡鶴見町有明浦508-8
- 2) 日本水産 大分海洋研究センター
- 3) TEL. 0972-33-1405  
FAX. 0972-33-1404  
E-mail. akkuroda@nissui.co.jp
- 4) 免疫学

松本 継男 MATSUMOTO TSUGUO

- 1) 〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎御所海道町
- 2) 京都工芸繊維大学・繊維学部・病理微生物学研究室
- 3) TEL. 075-724-7770  
E-mail. tsuguoma@ipc.kit.ac.jp
- 4) 昆虫病理微生物学、細菌学

二宮 学 NINOMIYA MANABU

- 1) 〒458-0811 名古屋市緑区鳴海町神ノ倉3  
(自宅)
- 2) 名古屋大学医学部附属病院難治感染症部
- 3) TEL. 052-876-1329 (自宅)
- 4) 生物学

高橋 弘樹 TAKAHASHI HIROKI

- 1) 〒444-8585 愛知県岡崎市明大寺町字西郷中38番地
- 2) 基礎生物学研究所
- 3) TEL. 0564-55-7572  
FAX. 0564-55-7571  
E-mail. taka@nibb.ac.jp
- 4)

---

## 事務局より

### ☞ 所属変更時の通知依頼

News等の送付に宅配便を利用しております。転送は出来ませんので、宛先となる所属や住所に変更が生じた場合には、学会事務局まで至急ご連絡下さい。

### ☞ 会費納入願い

平成13年(2001年)度分の会費(3,000円)未納の方は、納入をよろしく願いいたします。

新会員の入会を歓迎いたします。下記入会申込書をコピーしてご利用下さい。  
入会金不要、年会費 3,000 円 (平成 13 年 4 月現在) 入会申し込み頂ければ  
送付先：日本比較免疫学会 (JADCI) 事務局 振替用紙をお送りいたします  
〒173-8610 板橋区大谷口上町 30-1 日本大学医学部生物学教室内  
(問合せは TEL: 03-3972-8111 (内) 2291 または  
e-mail address: jadcitnk@med.nihon-u.ac.jp に願います)

---

## 入 会 申 込 書

このたび日本比較免疫学会に入会したく、下記の通り申し込みます。

年 月 日

日本比較免疫学会  
会長 古田恵美子殿

氏 名 \_\_\_\_\_

同ローマ字 \_\_\_\_\_

所 属 \_\_\_\_\_

記

会員種別：個人会員

連絡先：(〒 \_\_\_\_\_ ) (所属先・自宅 一方を○で囲む)

TEL: \_\_\_\_\_ 内線 \_\_\_\_\_

FAX: \_\_\_\_\_

e-mail address: \_\_\_\_\_

専門分野: \_\_\_\_\_

---